

(二) 次の文章を読んで、後の間に答えよ。

そのひとは初対面だったが、これまでにそのひとがどんなに秀れた仕事をなし遂げていたかを、わたしは知っていた。すでに高齢になつたそのひとと、とおりいつぺんのあいさつや世間話をしながら、わたしはあせつていた。このひとからあのときのことや、このときのことを、訊きださなくては。あの本を書いたとき、あなたは何歳で、何を考えて、何をしていたのか……、あの事件が起きたとき、あなたは何を感じたのか……。

歴史の生き証人を前にして、わたしの気持ちはやつていたのに、話はいつこうに核心に入つていかない。とりとめもなく時間が過ぎて、やがて辞去する時刻が來た。

う、うむ。なんというもつたない時間を……と思つたわたしの目の前に、おだやかな笑みをたたえて、ものごしのやわらかいそのひとは佇んでいた。

X

このひとが過去に何をしてきたかは、問題ではない。あまたの事件や出来事をのりこえて、いま・ここに、品のよい老婦人がいる。そのひとのねばりのあるゆつくりした話し方、目尻の笑いじわ、少し悲哀を含んだ笑顔、おだやかだが時に辛辣なものい……過去の生き方や姿勢が、そのままそのひとのふるまいに滲んでいると思うと、そのひとと過ごした数時間、気持ちばかりはやつて、ありのままに堪能しなかつたことが、かえつて口惜しく、もつたないことに思われてきた。

時間と経験が、このひとの「いま」を創つてきた。だとしたら、わたしがつきあうべきは、このひとの「過去」とではなく、このひとの「現在」とでなければならない……。

過去に有名だったべつのあるひとと、初めて遭つたときもそうだった。とあるパーティ会場で、大きな柱の陰に、小柄な女性が肩の力を抜いて佇んでいた。一時はスキャンダルでメディアを賑わせたこともあるそのひとの容貌を、わたしは写真で知つていた。だが、わたしから数メートルと離れていないところに立つてゐるそのひとは、気配を消した静謐さで、周囲の喧噪をよそ

に、超然としていた。あのエネルギーッシュな人生を送ったひとが、こんなふうに変わったのか……わたしは彼女の経てきた人生の波乱のあれこれを思い起こして、その脂の脱けたさりげない佇まいに、好感を持った。そのひとの経てきた容易でない時間がいまのこのひとを創ってきたのかと、目の前のそのひとのおだやかな風貌に、あらためて見入った。

そう思っていたら、エイジズム（高齢者差別）を告発するフェミニスト、バーバラ・マクドナルドのせりふが思い出だされた。彼女は七十歳近くになつて、こう言つたのだ。

「年老いた女性に、あなたはほかの年寄りと違つて元気だし生き生きしていると言つてはいけません。もしその女性がそれを求めことばとして受けとつたとしたら、あなたは年老いた女性を拒否することになります。

年老いた女性にお年よりもずっとお若いですねと言つてはいけません。それはあなた方の思い上がりであるばかりか、年齢を感じさせることをけなすことにつながります。

年老いた女性はあなた方若い女性のために存在しているわけではありません。またあなた方が私たちの役に立つと思つてもいけません。

年老いた女性が昔から歳をとつていたと思つてはいけません。<sup>2</sup> 七十歳、八十歳、九十歳がどんなものか、新しく発見する過程にあるのです。年老いた女性がこの経験について語れば語るほど、私たちを否定する社会に住む私たちは、それがどんなに革命的なことか、わかつてきます。」

この銀髪の小柄な女性は、アメリカのフェミニストの集まりで、こんな激烈なスピーチをした。そのなかに三十代のわたしもいた。わたしはそれに感激して、初対面の彼女に近づき、あなたのスピーチを日本に紹介させてもらえないかと申し出た。それがあとで翻訳書になつたのが、『私の目を見て——レズビアンが語るエイジズム』（シンシア・リッチとの共著、寺澤恵美子ほか共訳、原柳舎、一九九四年）である。

彼女はこんなことも書いている。

「若い女たちは、あなたがどんなふうに生きてきたかを聞かせてくださいと、年老いた女のものとヘライフヒストリーのインタビューにやつてくる。だれもわたしが日々何を感じ、何をして生きているかを訊こうとしない。そう、彼女たちは、わたしの『現在』ではなく、わたしの『過去』にしか関心を払わない。わたしは『過去の人』ではなく、こうして日々を生きている、ただ高齢なだけの女だというのに。高齢者は過去の抜けガラではない。それどころか、だれも経験したことのない、年齢という日々にあたらしい現実を探検している最中だというのに。」

わたしがおつきあいしていただいている高齢者のコミュニティでは、自己紹介のときに、過去の職業や経歴を言わないし、聞かないという不文律がある。どのひともすでに現役を退いているひとたちだ。「しゃば婆ではどんなご身分かは存じませんが……」、ここでは無名の者どうし、お互いままだ。

その代わり、自己紹介代わりに、いまうちこんでいる趣味を言う。「油絵を描いています」「しろうとオペラのサークルに入つて、年に一回の公演が楽しみで……」<sup>(6)</sup>トウゲイをやりたくてこの地に来ました」。

だが、つきあっているうちに、そのひとの趣味や特技がなんであるかすら、どうでもよくなつてくる。

「エノさんね、それって、大文字の趣味つていうんですよ。ほんとに大事なことはそのひとが何をしているかではないんです」とわたしに教えてくれた年長の友人がいる。そのことばが、身に沁みるようになつてきた。  
何をするか、ではなく、だれであるか。それも肩書きや地位では測れない、そのひとのありよう、ふるまい、口のきき方や身のこなし方……つまるところ、そのひとの Y が、そのひとについてのいちばん大切な情報だと思うようになった。そして一緒にいたいと思わせるのはそういう Y の上等なひとだし、また会つて時間を共にしたいと思うのも、そういう気持ちのよいひとたちだ。

他人を見るとき……わたしたちは、そのひとが過去に何をしてきたかを基準に、あの〇〇さん、と思いがちだ。わたし自身もしばしば、あのエノさん、という目で見られることが多い。だが、ひとがつきあうのは、そのひとの過去とではなく現在と、そしてそのひとの仕事とではなくそのひとの人柄とである。どんなにすぐれた業績をあげたひとだろうが、一緒にいて無神経な

ひとと、食卓を共にしたくない。かつての地位も業績も、いま・ここでの無礼さや傲慢さを免罪しない。

そのひとの Y から、そのひとが過去にくぐりぬけてきた修羅場や苦悩の数々を推しはかる。詳しくは聞かなくとも、あれやこれやがあつて、そのひとの「いま」があるのだと、感じられる。そしてふと、そのさなかにめぐり遭わないでよかつた、と感慨がよぎる。経験と時間とでなめされ、よく使いこまれた手帖の革表紙のように鈍い光沢を帶びて、そのひとが目の前にいる。わたしはただ、それをじゅうぶんに享受しきえすればよい。

なんという贅沢だろう。

(上野千鶴子『ひとりの午後に』による)

問1 傍線①、②、③の漢字の読み方を、それぞれひらがなで記せ。

問2 傍線④、⑤、⑥のカタカナを、それぞれ漢字に直せ。(大きく明瞭に書くこと。)

問3 傍線1「そのひととは初対面だった」とあるが、一生に一度しかない出会い、一生に一度限りの出会いのこと漢字四字で記せ。

問4 空欄Xに入る最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① そのとき、わたしは疑問を持ったのだ。
- ② そのとき、わたしは悟ったのだ。
- ③ そのとき、わたしは驚いたのだ。
- ④ そのとき、わたしは怒りを感じたのだ。
- ⑤ そのとき、わたしは笑いを感じたのだ。

問5 傍線2「七十歳、八十歳、九十歳」とあるが、それぞれの数え年のことと何というか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 七十歳(米寿)、八十歳(古希)、九十歳(白寿)
- ② 七十歳(古希)、八十歳(卒寿)、九十歳(傘寿)
- ③ 七十歳(米寿)、八十歳(白寿)、九十歳(古希)
- ④ 七十歳(古希)、八十歳(傘寿)、九十歳(卒寿)
- ⑤ 七十歳(白寿)、八十歳(古希)、九十歳(傘寿)

問6 空欄Yに入る最も適切な三字の表現を本文中から探し、そのまま抜き出せ。

問 7 本文の内容と最も合致するものを次の 中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① お年寄りは過去の抜けガラではなく、また過去に生きているわけでもなく、日々経験したことのない新しい現実を生きていることを考えれば、過去の職業や肩書きを聞くのは大変失礼なことになるので、聞かない方が良い。
- ② お年寄りになると、過去の生き方が現在の態度や振る舞いになつて現れることが多いのであるが、そのことは逆に考えれば現在の姿を見ることにより、その人の過去の生き方を想像することができることを意味している。
- ③ お年寄りに対して過去に何をしてきたかという点で考えていたが、ある時からそうではなくそのような過去の生き方が現在のその人を形作っているのだと考えるようになり、現在のその人に寄り添つて考えるのが良いと思うようになった。
- ④ 年をとつてから他人に判断される際に大切なことは、その人のふるまいや身のこなし方などの人柄中心になつてくるので、その人の過去の地位や業績や何をしてきたかなどということは、一般的にあまり重要視されなくなつてくる。
- ⑤ 若い女性が年老いた女性に対して、他の年老いた女性よりも髪も黒く肌つやもよくお若いですねなどとは、エイジズムの最も深刻な事例であるので、なるべく容貌や姿などの話をしないようにしなければならない。